撮影所殺人事件

酒井嘉七

青空文庫

a

あなたは、勿論、エキストラって御存じでしょう。――活動写真撮影のときに、臨時に雇われて、群衆になったりする――あれですよ。私は聖林（ハリウッド）にいる時分から、これが本職だったのです。私が千九百三十年に日本へ帰って来た時分には、こんなことで、此方で、おまんまなんか、頂けたものじゃ御座いませんでした。しかし、それから五年の後、私が刑務所（ビッグ・ハウス）から出て来ますと、日本の撮影場もすっかり、亜米利加（アメリカ）のあの頃と同じようになっていました。

私は、あちらへ舞い戻ったつもりになって、ＡＢＣプロや、ＸＹＺプロダクションで、毎日のように、エキストラ稼ぎをしていたんです。

あの朝は、とても霧の深い、息苦しいような、お天気でした。

「こんな日和じゃ、撮影も駄目だろう」

私は、こう思いながら、出て行ったのですが、監督は、

「夜の気分を出すのには丁度いい、すぐ撮影開始だ」

と命令したものです。

場面は神戸の元町、一丁目角。とても金のかかった、いいセットでした。撮影台本（コンティニュイティ）には次のように書いてありました――

「午前一時、人通りが殆んど絶えた元町通りを、ダンス・ホールの帰りか、または、酒場で飲んでいたらしい、与多者風の、若者二三が歩いて行く。と、一人が、軒店のおでん屋に頭を入れる――」

御存じのように、こうした場合に雇われるエキストラは、

「用意、カメラ、アクション――」

の声がかかると、セットの中にいることを忘れて、ただ、呑気に歩いているか、または、話していれば、それでいいのです。しかし、これが、なかなか、六ツヶ敷いことで、撮影されていながら、ほんとに遊んでいる時のような、ゆったりとした気分になれば、もう、エキストラとしては一人前なんです。

この時の、私の役は、今の台本にありました、「ダンス・ホールか、酒場からの帰りらしい与多者」で、カメラがクランクされ初めると、通りを少し歩いて、軒下のおでん屋に頭を突込めば、それでいいのでした。しかし、そのままでストップするんじゃありません。親爺さんに、なんとか相手になっていなければならなかったのです。で、私は、

「父(とっ)さん、一杯つけてくんな」

と、云ったものです。すると、この親爺さん、いかにも真面目に、

「やあ、いらっしゃい」

と、顔を上げましたが、見ると、五年前にほんものの元町通りでおでん屋をしていた親爺な

んです。私は、すっかり驚いてしまいました。

「おや、親爺さん、いつからエキストラになんか、なっているんだい」

と、聞きますと、少し変な顔をしましたが、何の返事もせずに、酒の燗をしてるんです。私は、はっきり、五年前の、あの夜を思い出しました。

（彼女を殺したのも、こんな霧の深い夜だった。ここに、この親爺がいたんだ。

――親爺さん、酒をつけてくんな。

と、云うと、

――はい、どうぞ。

と返事して、徳利を出した。大きなグラスのカップに入れて、ぐっと一と息、そして、ふと、後を見ると、彼女が男を連れて……）

こう、思って、ふと、振り向くと、何と驚いたことに、正真正銘の彼女が、男をつれて、こちらへ来るんです。私は、はっ、としました。

「こんな馬鹿なことが……。これはセットじゃないか」

こう思って、目を見はりましたが、彼女に相違ありません。私を裏切った、憎い女に違いないのです。

「しかし、あいつは、俺が殺したのじゃないか。五年前の、今日のように、霧の深い晩に、確に俺の手で殺したのだ。――それがために、長い五ヶ年を、刑務所で暮したのじゃないか」

私は自分自身で、気が狂ったのではないか、と思いました。実際、こんな馬鹿げたことがこの、世の中にあろうとは考えられません。しかし、近づいて来る女を見れば見るほど、彼女に相違ありません。

「うぬ、まだ生きていたのか」

こう思うと、私は逆上してしまいました。無意識の中に、五年前にやったと同じように、おでん屋の親爺が前においている出刀をひったくると――。

b

あのエキストラは筋書の通り、そして、監督をやっていた私の命令通りに、動いたに過ぎないんですよ。

（女を見つけると、おでん屋の親爺が前においた出刀を取って走る。

――裏切者！

と、叫んで切りつける）

この通りにやったのです。そして、ここまでは、いいのですね。しかし、次に、こう云ったものです。

「うぬ、五年前に殺してやったのに、まだ生きていたのか」

これが、どうも、変ですね。それに、五ヶ年間、刑務所にいた、と云っていますが、この期間はＸＹＺプロにいたことが明白なんです。

こうしたことを考えますと、疑いもなく精神病者ですね。しかし、あの場面の撮影は最後まで間違いなくやっているんですよ。撮影台本はこうなっていましたがね――。

――女に向って出刀を振り上げる。

――女、男にしがみ付く。

――二人の乱闘（短い間）

――女、死物狂いで、男の手に食い付く。

――男、兇器を取り落す。

――再び乱闘（短い間）

――男、女の咽喉を締める。

こうすれば長いですが、二三米のカットの連続で、短い一場面なんです。二人の演技は筋書通りに、そして、とても旨く、写実的に行われたのです。台本は、次に――。

――女、昏倒す。

――男、逃走す。

と、なっているのです。そして、この通りに行われたのです。ところが、「男」は、ほんと

うに、撮影場から逃走してしまって、「女」は昏倒したまま、遂に蘇生しなかったのです。

C

船の出帆まぎわでした。貨物船（フレイター）のこととて、別に見送人で混雑していた、と云うほどでもありませんでしたが、それでも、突堤の上には、誰を見送っているのか、テープを握った若い婦人もありました。私が上甲板を歩いていますと、

「二等機関士（セカンド・エンヂニーア）の××君はいるか」

と、声が聞えて、誰かタラップを駈け上って来ました。

「誰が自分を……」

私が、こう思って、下を見ると、彼なのです。

「おー、××か。ここだ、上って来い」

私は、手を差しのべました。

「とうとう、彼女を殺して来た。また、亜米利加だ。頼むぜ」

こう云うと、船艙の方へ走り去ったのです。しかし、二等運転手の職にある私が、どうして密航者（ストーアウェー）を——たとえ、それが、私の無二の親友であるにしても——見逃しましょう。船内を

隈なく捜査しましたが、どうしても発見することができなかったのです。

それから二ヶ月目でした。私は彼からの書状を受取りました。消印は聖林（ハリウッド）になっていました。どうして、あんなに旨く、船中に隠れていたのか。また、亜米利加官憲の、鋭い監視の目を、どう逃れて上陸したのか。――こうしたことは書いていませんでしたが、無事に着いた君に感謝する、そして、何とか名は忘れましたが、撮影所で、あの殺人事件のあった日に、元町通りのセットの中で、おでん屋の親爺に扮した男に、内密で、呉呉もよろしく言ってくれ、とありました。と、云いますのも、（彼の手紙によりますと）彼が裏切った女の話をして、殺害の決心を打ち明けると、

「それでは」

と、具体的な方法を考えてやり、そして、万一にも捕まった時の用意に、と、彼に発作的精神病者を装わせたのも、彼――おでん屋の親爺だったのですから……。

青空文庫情報

底本：「酒井嘉七探偵小説選」論創ミステリ叢書、論創社
2008（平成20）年4月30日初版第1刷発行
初出：「ぷろふいる　第三巻十一号」ぷろふいる社
1935（昭和10）年11月号
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※表題は底本では、「撮影所殺人事件《スタディオ・マーダー・ケース》」となっています。
入力：酒井　喬
校正：北村タマ子
2014年6月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

撮影所殺人事件

酒井嘉七

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/